

応用行動分析学における学校場面での機能とは？

特別非常勤講師の立場から

What is function of applied behavior analysis in special education?

土田菜穂

TSUCHIDA Naho

京都市立北総合支援学校 立命館大学大学院応用人間科学研究科

(Kyoto City Kita-Sogo School for Special Education ,Ritsumeikan University)

Keyword : staff ,special education ,function

1、問題と目的

京都市の総合支援学校では、特別非常勤講師として応用行動分析スタッフを任用している。筆者は、応用行動分析スタッフとして、京都市立北総合支援学校に勤務している。応用行動分析学は、「本人と環境の相互作用」として捉えており、筆者自身が学校現場の「機能」を認識することは重要である。今回は、教員が応用行動分析を指導方略の1つとして選択する『きっかけ』として何が機能していたかをフィールドノートをもとに検証することにした。

特に、本年度実施された応用行動分析学に関する研修会が、教員による個別相談の累積件数の増減に影響があるかどうかを検証することを目的とした。

2、方法

期間：2009年4月～10月

実施校：京都市立北総合支援学校

従属変数：個別相談の累積件数（個別課題や授業の改善に関する担任または担当者の相談件数。特に記録用紙等を媒体にしたやりとりがあるものに限る。相談内容と研修内容との関連の有無は問わない）

独立変数：研修会実施（課題分析や機能分析などの応用行動分析学の専門的な知識伝達と実習形式で特定の教員へのフォローアップ含む、小学部全体2回・中学部0回・高等部グループ別2回実施）

データの収集方法：筆者のフィールドノートより個別件数の依頼の表記した箇所を算出した。

社会的妥当性：各学部長に前期終了後、全相談ケー

スの報告を実施した。

3、結果と考察

図1で研修会実施によって、個別の相談件数が増減に影響があったとはいえない。ただし、小学部における研修会前後の累積数の増加、中学部の累積数増加の時期、高等部の相談件数の増加が確認された。これらは、研修会において、具体的事例の提示・聞き手の特化など構成要素を選定することで、個別相談における「きっかけ」として機能することが示唆された。さらに、図2のように、対象生徒を軸に継続された依頼の広がりが対象生徒のQOLの拡大に還元できると考えられる。そのために「きっかけ」か

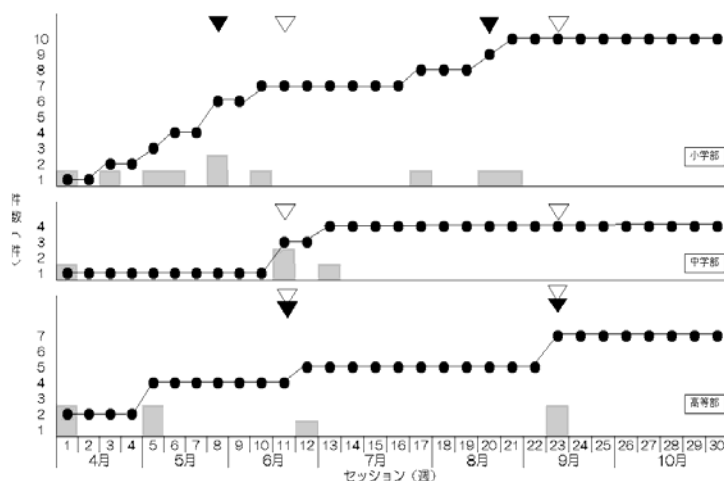


図1 研修会実施と個別相談件数の累積数
※▽→学部研究実施日(全学部が学部ごとに研究・研修を実施する)、▼→応用行動分析学の研修会

